

はじめに

編集にあたっての諸言

この曲集は、トビアス・ヒュームのエア集 第1巻より、通常の調弦法、または6弦目を全音低くした調弦法での演奏が可能な作品をタブラチュアから五線記譜法に変換し編集したものである。

～編集者 ピーター・マッカーシー（ロンドン イギリス 2021年）

タブラチュアの五線記譜法への変換方法に関しては、様々な方法が論究されてきた。今回の編集においては、最もシンプルな方法を使用した。如何にポリフォニーを明確に弾くかは奏者の腕に委ねる。

「？」の記号の記述：

リズムや音符がオリジナルの資料において、やや不明確で疑問の余地のあった箇所に示されている。これらの場所では編集者が最も適切と思われる選択をした。ただし、オリジナルの資料はサイズの大きい版であり、故に誤植はあまり多くはないと考える。既存するファクシミリをネットなどで参照されたい。

2nd, 3rd, 4th などの記述：

これらは、タブラチュアにおいて音符が通常より低い弦の所に記されている部分に示した。

オリジナルの小節線の保持に関して：

二重線（終始線）と小節線の混同が少なくとも6箇所、それぞれ違う形で見られる。この点に関して以下が識者の見解である。

音楽学者、ピーター・ホルマン

小節線のシンボルの選択はヒュームが依頼した印刷者（記譜者）によるものであろう。二重線で記されている小節は、繰り返しを示す付点の有る無しに限らず、繰り返して良いことを示唆する。特に作品が舞曲の場合、繰り返しの選択は奏者に委ねられたと考えられる。

チェンバロ奏者、音楽学者ニコラス・パール

二重線記号の使用における多様性は、複数の印刷者（記譜者）の異なる国籍や習慣に由来するのではないか。我々はオリジナルの曲集が一人の者によって出版されたと考えがちであるが、複数の者によって成されたという可能性も考慮する必要がある。

リュート奏者、リンダ・セース

リュート曲集においても、こうした例は多く見られる。二重線記号の選択は、作曲者ではなく印刷者（記譜者）によって成されたという結論に至らざるを得ない。これが明白なのは、歌曲において、タブラチュアと歌手のパートが同一の箇所なのに異なる小節線で記されている場合である。また、付点記号は小節線とは異なる印刷器具の部品・記譜表記であり、その有無は時にスペーシング（余白や配置）の問題と関係していると考えられる。

よって今回この曲集の編集にあたっては、付点なしの二重線をセクションと曲の終わりの両方に使用した。繰り返しに関しては奏者の判断に委ねる。

拍数が不足している小節 (cf. 22 Tinkeldum, Twinckeldum & 88 A Jigge) においては、元々小節内にある長い音の音価を延長するのが望ましい。

臨時記号は個々の音に記した。

- 1) すぐ後に続く同音には重複して臨時記号を記していない。
- 2) 4分音符以下の音価のグループの中には重複して記していない。

マーク・カウディ、スシ・ハインリッヒ、ピーター・ホールマン、ニコラス・パール、ステファン・ペグラ、アンドリュー・ロビンソン、マラキー・ロビンソン、リンダ・セースの諸氏に、その助言及び情報の提供に対して、ここに感謝の念を表したい。

(訳者: 小川麻子)